

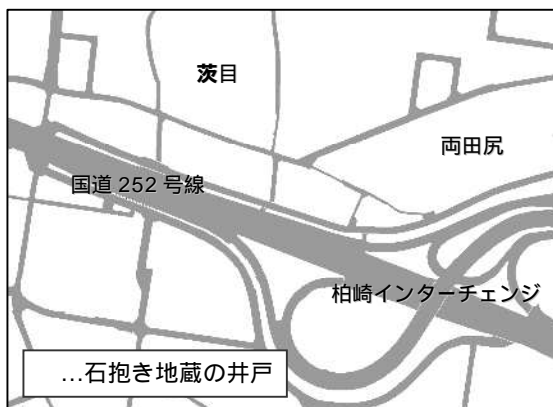
# 「柏崎の水」

## 両田尻 石抱き地蔵<sup>いぼ</sup>（疣地蔵）の井戸

柏崎市内には、岩之入の塩水井戸や中浜の弘法井戸（茶の池）など、弘法大師にまつわる水の伝説がいくつか残っている。両田尻の「石抱き地蔵」もそのひとつである。

その昔、弘法大師が各地をめぐり教えを広め歩いていた時、両田尻の地で老婆に一杯の水を所望した。老婆は「この辺りは水質が悪くて申し訳ないから。」と断ったが、大師が「どんな水でも構わない。ただ一杯でいいから。」というので、一杯の水を手渡した。大師はそれを一気に飲み干し、「確かによい水ではない。水をいただいたお礼に水を出して遣わそう。」と、手にしていた錫杖<sup>しゃくじょう</sup>で地面を突いた。すると不思議なことに、そこから清水がこんこんと湧き出てきた。後にこの場所を井戸にしようと掘ってみたところ、石を抱いた地蔵尊が出てきた。こんな良い水を飲むことができるのはこの地蔵尊の功德であるに違いないと、すぐに御堂を建て地蔵尊を祀った。

石抱き地蔵の所在地は、柏崎インターチェンジの近く、両田尻と茨目の境の三叉路である。地蔵尊を祀ったこの場所自体を、かつては「石抱き」と呼び、付近には石抱きという言葉を含む屋号も存在する。地蔵尊の側には現在も井戸が残るが、明治時代に書かれた「刈羽郡案内」に「石抱きといふ所に古井有



石抱き地蔵と井戸

り」とあることから、古い時代から使われていたものとわかる。地蔵尊は瘡<sup>おこり</sup>を病む人や母乳の出ない人に霊験があるとされた。また「疣地蔵」とも呼ばれ、疣に井戸水をつけると治る、と信仰された。平成の世になっても、疣が治ったとお礼参りに訪れる人がいたという。

かつて一面田んぼであったこの地も今では住宅地となった。子ども達の危険防止のため、この井戸にも石蓋がされ、現在は井戸水を使うことはできない。文献には、地蔵尊の場所にかつて寺があったとも、小さな石祠の諏訪社があったとも記されているが、地蔵尊の造立時期など詳しいことはわからない。しかし、十代以上続く旧家の方が代々この地蔵尊の管理を行ってきたという事実があり、昨今も敷地の草取りや御堂の修繕、側溝に溜まった落ち葉の処理などが行われていた。歴史ある石抱き地蔵に我々が接することができるのは、このような地元の方の地道な管理や整備のおかげであるといえよう。

瘡…隔日または毎日一定時間に発熱する病で、多くはマラリアを指す。（「広辞苑」第六版より）

参考にした本

- 「田尻村のはなし」酒井薫風著（224 サカ）
- 「柏崎市伝説集」柏崎市教育委員会 編（388 K キヨ）
- 「田尻漫歩今むかし」田尻公民館 編（224 タシ）
- 「石仏のまちを歩く」阿部茂雄 著（387 アヘ）